

24(A). 畧畫式【リャクがしき】

(刊) 大本一巻一冊
寛政七年(1795)十二月刊

蕙齋北尾政美【けいさい・きたお・まさよし】[画]
江戸 須原屋市兵衛【すはらや・いちべえ】板
[江戸] 春風堂野代柳湖【しゅんぷうどう・のしろ・りゅうこ】[刻]
彩色版



24(B). [畧画式【リャクがしき】]

(刊) 大本一巻一冊
寛政七年(1795)十二月刊

蕙齋北尾政美【けいさい・きたお・まさよし】[画]
江戸 須原屋市兵衛【すはらや・いちべえ】板
[江戸] 春風堂野代柳湖【しゅんぷうどう・のしろ・りゅうこ】[刻]
彩色版
相見香雨旧蔵



24(C). [畧画式【リャクがしき】]

(刊) 大本一巻一冊
寛政九年(1797)八月刊

蕙齋【けいさい】筆
江戸 須原屋市兵衛【すはらや・いちべえ】板
[江戸] 春風堂野代柳湖【しゅんぷうどう・のしろ・りゅうこ】[刻]
彩色版
改刻本



蕙齋画一連の略画式モノの最初とされる本。12.『諸職画鏡』と同版元、彫師によって刊行されており、26.『人物略画』、27.『山水畧画式』、28.『魚貝譜』もこの顔ぶれ。本書は、神田庵主人の序「(前略)花をめでぬるは野枝こそよけれ、工【たく】まずつからず天然の風味あり。此画も亦しかり。形によらず精神を写す。形をたくまず略せるを以て略画式と題す」と記し、外見の形ではなく精神を写す画の真髓に迫ったのがこの「略画式」である、という本書題名の由来が記され、次の見開き一丁の上欄には、下部には罫線上に描かれた裸の人体図が描かれる。この図は、ライッセ編『大画法論』(“Het groot schilderboek”, 1707年出版)を参考にした万象亭こと森島中良『紅毛雑話』(天明七年(1787)序 須原屋市兵衛板)所載の「人体美術解剖図」に端を発するとされる。即ち、西洋画法の極めて素早い攝取例として特記されるべきもの。中良は、蘭学の啓蒙書も書いたが、戯作者や狂歌師としても活躍し、万象(亭)の名で11.『繪本吾孀鏡』の編を行い、序文を21.『八幡太郎一代記』、22.『繪本大江山』にも寄せており、蕙齋と直接交流があった事は間違いない。

続く本図は、人体図をうけてか相撲図等・下帯姿の人物図(三丁半)、人物風俗図(平安風俗から当代職人や生活風景まで、十六丁半)、草花(三丁)、樹木に小禽(一丁)、江戸名所他風景(二丁)、魚・虫(一丁)、人物生活風景(巻初より草画、二丁)、達磨・七福神他(半丁)と、画題は多岐にわたっている。半丁の狭い画面に四図以上の画題や人物がみえるが、個々の図が侵害することなく伸びやかに展開しているために狩野博幸氏は「本書の各部が分化して後述の幾つかの略画シリーズが生まれた。」(『MUSEUM』No.338)と位置付ける。

(B)本は、題箋が欠落した状態で、巻末(A)本にはあった蔵本目録(半丁)が無く、摺りの状態から、(A)本より後印か。(C)本はさらに後、初版より二年後の寛政九年の奥付を持つが全丁改刻されており、初版発売後すぐに高い人気を得て初版が痛んだので改刻されたことが窺えよう。(C)本の奥付は25.『鳥獣略画式』(A)本と同じである。寛政七年(A、B)、寛政九年(C)版の他に、寛政十一年(1799)版、文化十一年(1814)版が確認されている(『国書総目録』)。

なお3.『つはものつくし』で触れたが、この『略画式』と26.『人物略画式』から直接、秋圃は図柄を含めた筆法を学び取ったか。(「蕙齋と秋圃図柄・筆法の模倣」参照)因みに喜多村信節は、「略画式を蕙齋が著して後、(北齋が)北齋漫画をかき」(『武江年表補正略』)と記し、北齋の有名な『北齋漫画』も本書に触発されて作られたものであるという。